岡山県議会議員
子ども応援・学力向上対策等特別委員会委員長
太田まさたか
おおた

県政だより
平成25年 秋号 VOL.22
Creative Life
自由と民主主義、国と地域を守れ！
編集責任者：太田正孝　岡山市北区延友455　TEL.（086）201－5523

「人間の芯」をつくり、「人の可能性」を伸ばせ！

市長選も終わり、平成二十七年春の統一地方選挙まで選挙はありません。政治に専念ができる時です。皆様の暮らしが少しでも向上するように頑張って行きます。

この夏、日本理化学工業を訪ねましたが、ここの皆さんから人として大切なものを教えて頂きました。心から感謝です。

この日本理化学工業で教えて頂いたことは、

◎「やり方は一つではない」

◎「限界でもないのに、限界と勝手に周辺が決めつけないことが大切」

ということです。

詳しくは「てくてくまさたか」にも書かせて頂きましたので、そちらも読んで頂ければと思いますが、ここを訪問してから今の学校の在り方について今まで見ていた角度とは違う角度で見るようになりました。

今の学校は人と同じようなやり方を強要して、人に劣等感ばかり与えているのではないでしょうか？劣等生を作ることが教育の目的ではないはずです。一度して出来なかったら、それが限界でしょうか？可能性を閉ざさせることが教育の目的ではないはずです。劣等感ばかりを与え、毎日積み残しができ、それが重なって行く。そして、取り戻せなくなっているのではないだろうか。こんなことをしていて、どうやって希望を取り戻せというのか。現実を希望に近づける力を身につけさせるのが教育の役割でもあるはずです。

岡山県のなかに将来に対して失望している子どもたちがいますが、「君たちには可能性がある」と気付いてもらえるような教育に変えたいと思うのです。子どもたちは私たちの希望です。子どもたちが希望の灯をともし続けられる社会にすることが今の大人の責務です。

そういう思いを持ち、九月定例県議会の一般質問ではやり直しができる学校を作ってはということで、「新しい高校づくり」を項目に挙げ質問をしました。突拍子もないと思われたのか、上手く噛み合った議論にはなりませんでした。やり直しをしたいと思っている子どもたちのためにこれからも粘り強く頑張っていきたいと意を強くしているところです。

そしてもう一つ、教育でしていきたいことがあります。**日本人としてのアイデンティティを育てる教育をすること**です。ある時テレビを見ていましたら、対談番組にハリウッドでも活躍されている俳優の渡辺謙さんが出演しているではないですか。渡辺さんは仕事の仕方を訊ねられて、「ハリウッドで頑張っているアイリシュの俳優がアイリシュとして俳優業をしている。それを見て、自分はハリウッド人でもないし、日本人俳優として俳優をすればいいんだというように考えるようになった。」とお話をしていました。胸にストーンと受け入れることができました。こうした答えができるのは、自分が何者であるかをはっきり認識しているからです。今グローバル人材育成ということを教育委員会が力を入れていますが、どうでしょうか？グローバル人なんか世界中どこにもいないと思うのです。日本人であれば、常に日本人として国際社会のなかで仕事をしていくことになります。その自覚がなければ、国際社会で活躍などできないのではないでしょうか。もっと日本人として自国のことを理解できる人間をつくっていく教育にしていかなければならないと思うのです。渡辺さんのお話に感心するばかりでした。こうした**「人間の芯」**をつくることこそ教育の役目でもあります。

教育についていろいろ申しましたが、いくら行政が頑張っても限界があります。子どもたちの最初の教育の場は家庭なのです。子どもたちが最初に愛を受けるのは家庭なのです。家庭はとても大切です。良い家庭を作ることが一番の社会貢献と言って良いのではないでしょうか。社会は子どもたちを常に温かく見守り、常に支える存在であるべきです。そうなるように私は政治に力を注いで行きます。明日が子どもたちの明るい未来になることを願ってやみません。今後とも私の議員活動に対しまして、温かいご理解ご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

岡山県議会議員
子ども応援学力向上対策等
特別委員会委員長
太田　正孝

運動会での応援合戦

平成二十五年度 九月定例県議会
開期 九月九日～十月三日

物流拠点 条件緩和に向けて研究から検討に変わりました。

九月十八日に県議会一般質問した内容の一部を紹介致します。

答弁中の知事の顔はいつものにこやかな顔と違います。知事の真剣さがこちらにもビンビン伝わって来ます。

さて、質問した結果です。

まず、物流拠点都市をどう目指すのかという問いについてです。市街化調整区域内では、トラックターミ

規制緩和を求める太田正孝

再質問に答える伊原木知事

ナル等の物流拠点施設整備は現在インターチェンジから離れている距離が半径1km以内でなければ出来ません。せめて5km以内までは作れるよう規制緩和できたならば、物流施設の整備は促進されるのではないかと訊くと、知事は「しっかり検討していく」と前向きな答弁をしてくれました。この答弁で、これまで1km範囲ということが緩和する意思があることが明らかになった訳です。検討されるのは、県が権限を持つ区域にある岡山総社IC、早島IC、山陽ICです。緩和されれば、物流の拠点性を高められます。スピード感を持って仕事をしたいとしている知事。早く結論を出されることを期待しています。

物流拠点都市を目指すことを訴える太田正孝

二〇〇二～二〇一二年までの県内水害被害額累計が二三五〇億円。

平成二十五年七月中旬から九月中旬にかけて各地で集中豪雨、大雨、台風の被害が出ました。被害に遭われた方々には心からお見舞い申し上げます。

今年の雨の降り方を見ていますと亜熱帯気候ではないかと思わせるほどの激しい降り方でした。連日の雨で九月四日の午前中にはあちこちで増水して畑や道路が冠水。そして、自宅近くの足守川にある排水機場ではポンプをフル回転させていました。けれども、用水の水位はほとんど変わりません。運転操作している当番の一人はこれ以上降り続けると本当に危険じゃなぁと不安げな顔をして他の当番に話かけていました。その言葉はちょうど二年前の足守川の越水を思い出してのものです。今回は幸い午後には雨が上がりましたので、難を逃れることができたのですけれども、これからこうした大雨が頻繁に降るのではないかと不安は大きくなっています。

こういう状況を示しながら、伊原木県知事をはじめ県当局に河川改修に力を入れるように求めました。

冠水した農道（用水と農道の区別ができません。）

県当局からは二〇〇二～二〇一一年までの県内水害被害額累計が二二五〇億円で、全国で七番目の大きさであったことが示され、伊原木知事は河川費の増額を国に求めていることも明らかにしました。岡山は安全安心と言われていますが、実は水害の多い地域なのです。伊原木知事と力をあわせて、過去に越水した箇所など問題箇所の改修に最善を尽くしていきますが、これから岡山でも他県のように激しい大雨があるかもしれません。まさかの時のために、避難の仕方については家族、地域の方々でご確認をしておいてください。

勢いよく流れる用水

やり直しができる学校づくりをするべきではないか。

新しい高校づくりについて質問しました。

私の周りにも、人生やり直しができるものなら、やり直しをしたいと思っている人は多くいます。若い時なら、いくらでもやり直しがききます。ましてや十代なら尚更のことです。社会としてもお手伝いをしてあげたいものです。

平成二十三年度の岡山県のデータになりますが、高校中途退学者九〇四名で、学業不振による者が四十八名、もともと高校生活に熱意がない者が一八四名でした。

また、平成二十三年度の高校生の不登校生徒数は一三二六名、出現率は二・四三％で、全国の一・六八％に比べて高い率となっています。

学力についても厳しい状況です。

ついては東京都が平成十二年度から始めている新しい取組を見習って、新しい高校を作るべきではないかと考えています。

東京での取組を紹介します。中学まで不登校傾向であったり、高校を中退したりした生徒、また、小学校から中学校にかけて頑張りきれなかった生徒などを想定し、定時制のチャレンジスクールや全日制のエンカレッジスクールを設置しているのです。チャレンジスクールでは入学時の学習水準では「過去は問わない」としていて、入学後の主要科目においては、高校の指導要領レベルではなく、中学レベルから学べる科目も開講されています。もう一つの、エンカレッジスクールでは基礎の基礎から学び直しに力を入れる一方、生徒指導、地域奉仕活動にも力を入れて、社会に出てからも自信を持って人と接することのできる人物の育成をしています。こうした学校が東京には現在十校もあります。

私の新しい学校を作るべきとの質問の結果をお伝えします。知事は

「これまでも多様な生徒を受け入れるため、総合学科や単位制を導入し、きめ細かい対応を行ってきていると聞いています。まずはこうした学校の機能を充実させるとともに、新たに県北地域に設置する定時制高校にも、同様の機能を期待している。」と答弁しました。

教育再生に取り組む教育長の答弁を聞く太田正孝

教育長からは結果が十分出せていないとの答弁もありました。私も何もしていないとは言いませんが、やり直せる場づくりはとっても大切なことと思っています。知事、教育長をはじめとする県の幹部にもっと目を向けてもらえるように努めて行きます。

全国学力テストの結果、若干上向きになってきました。

全国学力テストは小六、中三の全員参加のもと実施され、結果は四十七都道府県中三十八位、三十二位でした。昨年は四十五位、四十二位ですから、上向きになったことには間違いがありません。ただ気をつけておかなければならないのは、この時は全員参加ではなかったということです。その前に二十番台もありましたが、確かこの時も抽出であったように思います。何を言いたいのかと言いますと、まず毎回全員参加の調査ではないということです。

ついては、抽出の場合、やはり結果についてある程度の幅をみて、受け止めるべきで、単純に一喜一憂すべきでないと思います。

次に、子どもたちの学力の変化については今回応用問題での正解率が良い部分が見えました。一方、基礎問題については正答率が他県よりも低い状況でした。これらの結果を見て、子どもや現場の頑張りで考える力が身につき始めていると見えますが、もう少し努力が必要なのではないか。それから、基礎についてはやはり反復練習をしている県が結果は良かったのではないかとの意見も聞きます。

今後についてですが、良い順位をとろうとする県のように全国学力テストを想定したテストを繰り返しさせることがいいのかどうか。私は子どもが小さい時期には勉強に感心が湧くような教え方に力を

少人数学級を導入している中学校

置いて欲しいと考えています。あまりにも結果だけを求めて、テストばかりして、勉強嫌いな子どもたちをたくさん作るようなことなど決してして良いはずがありません。学校が好きになる子どもを作りたいものです。学校が好きになれば、子どもたちはドンドン伸びていくと信じています。

体罰についての考察 ―教育講演会に参加して

夏の甲子園地方予選

元野球部監督の講演を聞く機会に恵まれました。講師は甲子園での例の発言で有名になった人です。講師は「体罰は必要だ」と言い切りました。元プロ選手が体罰否定論を掲げていることにも反論を展開していました。講師は彼のように野球センスもよく自分をコントロールできる選手であれば、体罰をしなくても良いと言われました。身体能力が高くても、学習能力が低かったり、自己コントロールが出来なかったりする選手をどうするのか?ましてや道を外れそうな生徒をどう導くのか?野球がなかったら、間違った人生を歩んでいたかもしれない人間も多くいたはず。選手たちに本気でぶつかっていった結果、生徒たちはまっとうな道を進んでいったと語られました。生徒たちに愛情を持っているから、本気になって指導したのだと監督時代の心境も漏らしていました。

続けて、彼の別な発言にも触れました。彼は超エリート大学のコーチをしていたのですが、その感想として、「私の指導に対して選手たちは良く指導内容を理解してくれる」と述べている件です。講師は当たり前だと言われました。頭の良い選手ばかりなので、理解できないはずがない。それを持って、体罰を否定するのは違うと、ここでも反論していました。

講師と彼との指導について考え方には相当の開きがあります。指導する対象がどうなのかということを講師は問題にしていると感じました。

講演の中で、悪魔の心になった子どもに対して、どう指導するのかという問いを会場に投げかけていましたが、聞く耳を持たなくなった子どもたちにどう指導していくのか。大きな課題です。講師は子どもが良くするための体罰は認めるべきと主張し、体罰をしても良くならなければならないということが決められていたならば、逆になかなか体罰を与えることはできないものだと言われました。そうなのだろうかとも思えます。今、教育委員会は体罰をしてはならないとしか言っていません。子どもたちをどう指導していくのか示しきれていません。

話を元に戻しますが、私が思うに二人とも野球が大好きである。選手たちが好きである。ここがしっかりしているから、選手がついてきてくれるのだと思いました。

今回の講演ではいろいろ考えさせられました。

講師の

「義務を教えれば、感謝を覚える。感謝の反対は当たり前である。当たり前になったら、良くない。」

との言葉も耳に残りました。

相手をいかに思うか。ここから行動が決まることは間違いないでしょう。私は人を愛し続けていきたいと思います。

おかやまマラソン【仮称】 ―行政だけでやるイベントにしてはいけません。―

おかやまマラソン【仮称】(以降は仮称を略させて頂きます)の開催に向けて舵が切られつつあります。

ただ、私には大きな心配があります。それはこのおかやまマラソンについての収支計画を聞いてです。八月十二日に私の所属する岡山県議会環境文化・保健福祉委員会での説明によると、行政負担は先行事例の倍の約二億円で、協賛金・寄付金は先行事例の約三分の一の三千万円というものでした。県当局は開催目的を経済効果としていますが、この収入見込みからは経済効果を考えているように思えません。協賛金を少なく見積もっているのは企業等も余り評価しないだろうということを県当局自ら認める証でもあります。そして支出総額を見てみると、先行事例並みの約三億五千万円にしています。これは一万五千人のランナーに来て頂くためにはこれだけのお金は最低でも必要ということでしょう。支出と協賛金・寄付金との差の穴埋めを税金で行おうとしているのです。委員からこの収入見込み額について質問が出ると、できるだけ協賛金・寄付金を増やしたいとの予想通りの答弁。行政マンとして無難な計画を作り上げたというもので、熱い思いというものが伝わって来ません。これでは知事が語る岡山の情報発信は難しいのではないでしょうか。こうした計画を見直すことを委員会から求めました。

マラソンコースに入るのかどうか注目されている岡山城

そして、この日マラソン大会の説明前に事業の再点検の話があり、県の財政力に見合わないような支出については見直したいとの言葉があったばかりで、どうしてこのような過大な行政負担をするものを提出してきたのかとタイミングの悪さを感じるばかりでした。

いずれにしましても、一万五千人の方々に集まって頂くことが目標になってはいけません。行政だけでやるイベントにしてはいけません。岡山の魅力を全国発信していこうという主旨で開催されるマラソン大会ですから、そのようになるように提言をし続けていきますし、岡山の魅力アップも図っていけるような大会にしていかなければと考えています。

てくてくまさたか

福島県新地町を訪問(七月二十七日)

津波を想定し、盛土整備中。

福島県新地町を訪問。復興が進んでいるものの、今もなお傷跡が残っています。現地では住宅建設、くらし再建に力を入れていました。

高齢者用住宅の建設、集落ごとの高台への移転、津波対応できるように四~五メートルの盛土整備(この上に住宅建築をするそうです)をしていました。

千歳市の子育て支援センター、保育園、学童保育の三機能の併設施設を訪問(八月一日)

千歳市の子育て支援センター、保育園、学童保育の三機能の併設施設を訪問しました。小さな子どもたちは体育館の中で元気に遊んでいました。ここには子どもたちが動き回るに十分なスペースがありました。スタッフも保育資格、教員免許を持っている職員がたくさん配置されていました。こういう環境を岡山でも作りたいものです。

保育園

センターのロビー

事務所に掲示されているボード

第四十回吉備剣道錬成大会(九月一日)

吉備小学校体育館

表彰風景

第四十回吉備剣道錬成大会。吉備剣道スポーツ少年団が創立されて四十年。私が吉備小学校三年生の時にできて、草創期から全国で活躍していました。

この日も約八〇〇名の剣士が参加してくれ、すばらしい試合を展開してくれました。

てくてくまさたか

粉が出難いチョーク（ダストレスチョーク）を作っている日本理化学工業を訪問（七月三十一日）

粉が出難いチョーク（ダストレスチョーク）を作っている日本理化学工業を訪問。

この会社は知的障がいのある方を二十人以上雇用されています。雇用の歴史は私が生まれる前からということで、ビックリです。私も工場のラインで働いたことがありますが、実際に現場を見せて頂くと、信じられないようなコンベアーのスピードでの作業。このラインは健常者ばかりでしているラインよりも作業効率が良いのではないかと疑いたくなるほどでした。

何故奇跡のラインができたのか。責任者からその理由を聞きました。自分ができるからといって、そのやり方を押し付けてもいけないと知ってからは相手がどうすればできるのかを考えるようになり、出来るやり方を身につけてもらった。そして出来るようになって、認めると、どんどん上達していった。たとえば、「秤を使っての作業にしても、目盛を正確に読めないけれども、使う材料の入れ物と同じ色で目盛のところにマーキングをしておくと、正確な作業ができる。」と話されていました。工夫の積み重ねと忍耐強く続けることで、奇跡のラインが出来ているのです。

私は今回大切なことを学びました。やり方は一つではないということです。自分が出来るやり方を探す。周りで出来ない人がいたならば、見つけてあげる。限界でもないのに、限界と周辺が決めつけることは一番良くないと学びました。人の可能性をもっと信じて、任せてみると、人は伸びるのではないでしょうか。

秋田県小坂町の都市鉱山を視察（八月二十一日）

貴重な金属が沢山含まれている電子基盤

説明を受けているところ

金山の定義を知っていますか？金が含まれている山を掘って、一トン当たりに五g以上含まれていると、金山というという話を聞きました。これがどれくらい大変な話なのか、見当もつきませんが、いま日本から採れるという話など全く聞きません。ところが、使われなくなった携帯電話を一トン集めると、二〇〇gの金をとることが出来るというのです。つまり、携帯電話の方が金山よりも四〇倍も金がとれるということになります。日本の中にはこれだけ携帯電話が普及していて、使われなくなった携帯電話もいっぱいであるのです。ということは、日本には金がいっぱいあるということになります。これは携帯電話ばかりではありません。ほかの貴重資源でも同じことです。都市のなかには鉱山のように沢山の貴重金属がたくさんあるのです。このことを「都市鉱山」と言うらしいです。なかなかシャレた言い方です。都市鉱山にある貴重金属をどれだけ再資源化できるのか。ある企業は二十二種類の元素について再資源化する技術を確立しているそうです。こうした企業が増えることこそ、これからの日本の元気の源になると思うのです。行政もこうした貴重金属が再資源化されるルートづくりにはもっと支援をすることも必要です。私も県議会からそのことを取り上げて、再資源化を応援していきたいと思います。

建部保育園に設置された太陽光発電装置（九月三日）

太陽光発電モニター

建部保育園に設置された太陽光発電装置を見に行きましたが、あいにくの雨でほとんど発電していませんでした。日頃の反省をするばかりです。

でも、ここで元気な子どもたちに会えたことは喜びでした。

旧赤坂町の町苅田にある作業所を訪問（九月三日）

箱詰め作業をしているところ

ホタテ貝の紐通し作業

旧赤坂町の町苅田にある作業所を訪ねたところ、地元企業からいただいた箱詰の仕事、虫明や日生等の地元牡蠣の採苗用にホタテ貝の紐通し作業を丁寧にしていました。コミュニティカフェも併設してあり、コーヒーは二〇〇円です。飲みましたが、とっても美味しかったです。近くを通られたら、お寄りくだされば、と思います。

高校の文化祭会場での献血（九月七日）

献血バス

高校の文化祭が開催されているなか、献血がされていました。

高校生たちは初めての献血に少々戸惑っている様子も窺えましたが、たくさんの高校生が協力していました。

十代、二十代の献血が少ないということで、これをきっかけに献血の協力を続けて欲しいと願います。

私は二十回目の献血ができました。

献血20回目

十月に自民党内閣部会長に就任した佐藤ゆかり参議院議員と意見交換（十月五日）

佐藤ゆかり参議院議員は三本目の矢の成長戦略をまとめなければならないと熱い思いを語っていました。また、防災にも力を入れているとのことでした。これからも国政と連携をとりながら、県政の発展に努めていきます。

第九回わっしょい和んさか吉備高原フェスタ（十月六日）

晴天に恵まれ、岡山県のド真ん中の吉備中央町に大勢の人出でした。特産のピオーネや野菜などもとってもお買い得でした。

編集後記

前回号では横綱大鵬が「忍」という字が好きだったことに触れて巻頭言を書いた。

この忍ということで、イメージできる歴史上の人物と言えば、徳川家康ではなかろうか？その家康が「不自由を常に思えば不足なし」という言葉を残しています。はじめからないと思えば、不満は出ない。あると思うから不足に思うのだ。江戸幕府が二七〇年も続いたあたりには、このあたりのことと関係しているのではないかと思う。不足の気持からはなかなか前向きになれないことは経験上からもよく分かっているつもりだが、なかなか徳川家康にはなれない。なれないのは当然と言えば、当然。少しでも近づければと思うばかりだ。思うと同時に、やはり修業が必要と悟る今の私だ。

（M・O）